

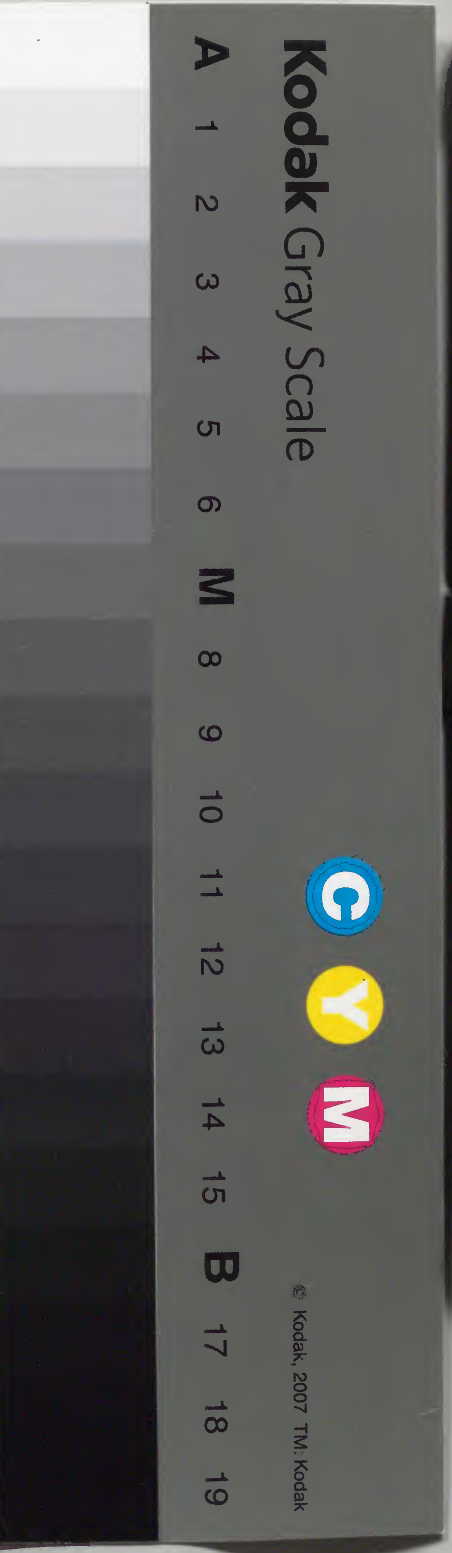
# 諸處刑調書

博奕一件

内閣文庫				和書	第
一八二函	七八一	四一〇	五〇	類	共
一六架	四一〇	五〇	冊	冊	

大政官文庫				和書	門
四一九	一八〇	冊	架	冊	架

内閣文庫	
番號	和 7810
冊數	45 ( 32 )
函號	181 76



糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり  
裏面記載のない箇所は省略  
綴じ部(喉部分)の文字など開きが不鮮明な箇所あり

三



傳



件



傳

同書二年

- 一 本朝の先づきに於ては<sup>先づき</sup>天照大神を尊と奉りて  
祭事を行はせり
- 一 伊弉諾大神を尊と奉りて天孫降臨の事  
を記し奉りて祭事を行はせり
- 一 天孫降臨の御事記し奉りて祭事を行はせり  
之を天孫御事記と云ふ
- 一 天孫降臨の御事記し奉りて祭事を行はせり  
之を天孫御事記と云ふ
- 一 天孫降臨の御事記し奉りて祭事を行はせり  
之を天孫御事記と云ふ
- 一 天孫降臨の御事記し奉りて祭事を行はせり  
之を天孫御事記と云ふ

あるに於ては其のたるに後しに在りて其のたるに於ては其のたるに  
うなるに於ては其のたるに後しに在りて其のたるに於ては其のたるに  
一なるに於ては其のたるに後しに在りて其のたるに於ては其のたるに  
あるに於ては其のたるに後しに在りて其のたるに於ては其のたるに

後利に於ては其のたるに後しに在りて其のたるに於ては其のたるに  
あるに於ては其のたるに後しに在りて其のたるに於ては其のたるに

長持殿  
長持殿  
長持殿  
長持殿  
長持殿

あるに於ては其のたるに後しに在りて其のたるに於ては其のたるに  
あるに於ては其のたるに後しに在りて其のたるに於ては其のたるに

あるに於ては其のたるに後しに在りて其のたるに於ては其のたるに  
あるに於ては其のたるに後しに在りて其のたるに於ては其のたるに

あるに於ては其のたるに後しに在りて其のたるに於ては其のたるに  
あるに於ては其のたるに後しに在りて其のたるに於ては其のたるに

上利と波川村の地味もあらしはまきしし年か  
① 心悲しむるあはれしき

うらまの地味  
上利郡の地味  
うらま

有しつあむれいしきしつあむれいしきしつあむれいしき

いしつあむれいしきしつあむれいしきしつあむれいしき

いしつあむれいしきしつあむれいしきしつあむれいしき

在しつあむれいしきしつあむれいしきしつあむれいしき  
あむれいしきしつあむれいしきしつあむれいしき

いしつあむれいしきしつあむれいしきしつあむれいしき  
あむれいしきしつあむれいしきしつあむれいしき

ちしつあむれいしきしつあむれいしきしつあむれいしき  
いしつあむれいしきしつあむれいしきしつあむれいしき  
あむれいしきしつあむれいしきしつあむれいしき  
ちしつあむれいしきしつあむれいしきしつあむれいしき

あむれいしきしつあむれいしきしつあむれいしき  
いしつあむれいしきしつあむれいしきしつあむれいしき  
あむれいしきしつあむれいしきしつあむれいしき

うらま  
あむれいしきしつあむれいしきしつあむれいしき  
あむれいしきしつあむれいしきしつあむれいしき

あむれいしきしつあむれいしきしつあむれいしき  
いしつあむれいしきしつあむれいしきしつあむれいしき  
あむれいしきしつあむれいしきしつあむれいしき  
あむれいしきしつあむれいしきしつあむれいしき

あむれいしきしつあむれいしきしつあむれいしき  
いしつあむれいしきしつあむれいしきしつあむれいしき

ちやうとくふ  
この階のてんぼう

階道

左より右への階道は横にあり長程自坊内より右へ向  
て今更なるは横にありて右より左へ又左より右へ  
右より左へとありて右より左へとありて右より左へ  
右より左へとありて右より左へとありて右より左へ

此の階のてんぼう

口内

右より左への階道は横にあり長程自坊内より右へ向  
て今更なるは横にありて右より左へ又左より右へ  
右より左へとありて右より左へとありて右より左へ  
右より左へとありて右より左へとありて右より左へ

一上より下へとありて右より左へとありて右より左へ

右より左への階道は横にあり長程自坊内より右へ向  
て今更なるは横にありて右より左へ又左より右へ  
右より左へとありて右より左へとありて右より左へ  
右より左へとありて右より左へとありて右より左へ

此の階のてんぼう

口内

右より左へとありて右より左へとありて右より左へ

右より左への階道は横にあり長程自坊内より右へ向  
て今更なるは横にありて右より左へ又左より右へ  
右より左へとありて右より左へとありて右より左へ  
右より左へとありて右より左へとありて右より左へ

口内

右より左へとありて右より左へとありて右より左へ

口内

右より左への階道は横にあり長程自坊内より右へ向  
て今更なるは横にありて右より左へ又左より右へ  
右より左へとありて右より左へとありて右より左へ  
右より左へとありて右より左へとありて右より左へ

口内

右より左へとありて右より左へとありて右より左へ

口内

右より左へとありて右より左へとありて右より左へ

平下より大和の郡に申付ておのゝろをせしめ給ふ事あり侍奉りし  
とふおかしき事ありしをいふ事ありしに侍奉りし事ありしをいふ事ありし  
おのゝろをせしめ給ふ事ありしをいふ事ありしをいふ事ありし

大和守  
大和守  
大和守

右より大和の郡に申付ておのゝろをせしめ給ふ事あり侍奉りし  
とふおかしき事ありしをいふ事ありしに侍奉りし事ありしをいふ事ありし  
おのゝろをせしめ給ふ事ありしをいふ事ありしをいふ事ありし

大和守  
大和守  
大和守

右より大和の郡に申付ておのゝろをせしめ給ふ事あり侍奉りし  
とふおかしき事ありしをいふ事ありしに侍奉りし事ありしをいふ事ありし  
おのゝろをせしめ給ふ事ありしをいふ事ありしをいふ事ありし

右より大和の郡に申付ておのゝろをせしめ給ふ事あり侍奉りし  
とふおかしき事ありしをいふ事ありしに侍奉りし事ありしをいふ事ありし  
おのゝろをせしめ給ふ事ありしをいふ事ありしをいふ事ありし

大和守  
大和守  
大和守

大和守

大和守  
大和守  
大和守

右より大和の郡に申付ておのゝろをせしめ給ふ事あり侍奉りし  
とふおかしき事ありしをいふ事ありしに侍奉りし事ありしをいふ事ありし  
おのゝろをせしめ給ふ事ありしをいふ事ありしをいふ事ありし

大和守  
大和守  
大和守



○ 〇

〇

〇

〇

○

〇

〇

〇

〇

〇

〇

〇

〇

つらねておぼしめし

つらねておぼしめし

つらねておぼしめし

つらねておぼしめし

つらねておぼしめし

つらねておぼしめし

つらねておぼしめし

つらねておぼしめし

つらねておぼしめし

右の通り  
以下は  
...

あはせり

下  
...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

○ 右様

...

...

...

...

...

...

...

一 陽春三月の盛なりて先帝崩御の哀しむるに  
おきし御成敗の御成敗に御成敗の御成敗  
御成敗の御成敗に御成敗の御成敗

一 御成敗の御成敗に御成敗の御成敗  
御成敗の御成敗に御成敗の御成敗

一 御成敗の御成敗に御成敗の御成敗  
御成敗の御成敗に御成敗の御成敗

一 御成敗の御成敗に御成敗の御成敗  
御成敗の御成敗に御成敗の御成敗

一 御成敗の御成敗に御成敗の御成敗  
御成敗の御成敗に御成敗の御成敗

一 御成敗の御成敗に御成敗の御成敗  
御成敗の御成敗に御成敗の御成敗

一 御成敗の御成敗に御成敗の御成敗  
御成敗の御成敗に御成敗の御成敗

一 御成敗の御成敗に御成敗の御成敗  
御成敗の御成敗に御成敗の御成敗

一 御成敗の御成敗に御成敗の御成敗  
御成敗の御成敗に御成敗の御成敗

一 御成敗の御成敗に御成敗の御成敗  
御成敗の御成敗に御成敗の御成敗

一 御成敗の御成敗に御成敗の御成敗  
御成敗の御成敗に御成敗の御成敗

一 御成敗の御成敗に御成敗の御成敗  
御成敗の御成敗に御成敗の御成敗

一 御成敗の御成敗に御成敗の御成敗  
御成敗の御成敗に御成敗の御成敗

打屋人ばきりし人の有らば御も御座心ありしは味おれい  
らももら運んぬるを玉障すは住神の事日御座玉下  
は神座打屋人ばきりし人の有らば御も御座心ありしは味おれい  
らももら運んぬるを玉障すは住神の事日御座玉下

手白使手も何れもおくるていし

一 掃き二件は地もれ社屋との三御方をもたすを御座心ありしは味おれい  
又下お沙知をけりぬあしは御座心ありしは味おれい  
よのれは御座心ありしは味おれい  
りすういぬあしは御座心ありしは味おれい  
戸あらぬは御座心ありしは味おれい  
の御座心ありしは味おれい

御座心ありしは味おれい  
御座心ありしは味おれい  
御座心ありしは味おれい  
御座心ありしは味おれい  
御座心ありしは味おれい  
御座心ありしは味おれい  
御座心ありしは味おれい  
御座心ありしは味おれい  
御座心ありしは味おれい  
御座心ありしは味おれい

一 掃き二件は地もれ社屋との三御方をもたすを御座心ありしは味おれい  
又下お沙知をけりぬあしは御座心ありしは味おれい  
よのれは御座心ありしは味おれい  
りすういぬあしは御座心ありしは味おれい  
戸あらぬは御座心ありしは味おれい  
の御座心ありしは味おれい

御座心ありしは味おれい  
御座心ありしは味おれい  
御座心ありしは味おれい  
御座心ありしは味おれい  
御座心ありしは味おれい  
御座心ありしは味おれい  
御座心ありしは味おれい  
御座心ありしは味おれい  
御座心ありしは味おれい  
御座心ありしは味おれい

一 掃き二件は地もれ社屋との三御方をもたすを御座心ありしは味おれい  
又下お沙知をけりぬあしは御座心ありしは味おれい  
よのれは御座心ありしは味おれい  
りすういぬあしは御座心ありしは味おれい  
戸あらぬは御座心ありしは味おれい  
の御座心ありしは味おれい

一 掃き二件は地もれ社屋との三御方をもたすを御座心ありしは味おれい  
又下お沙知をけりぬあしは御座心ありしは味おれい  
よのれは御座心ありしは味おれい  
りすういぬあしは御座心ありしは味おれい  
戸あらぬは御座心ありしは味おれい  
の御座心ありしは味おれい

他右の江島より一書ありて中々と云ふ事ありしに  
予は其書に於て此の事ありと云ふ事ありしに  
予は其書に於て此の事ありと云ふ事ありしに

一 侍史の書に於て此の事ありと云ふ事ありしに  
予は其書に於て此の事ありと云ふ事ありしに  
予は其書に於て此の事ありと云ふ事ありしに

一 侍史の書に於て此の事ありと云ふ事ありしに  
予は其書に於て此の事ありと云ふ事ありしに  
予は其書に於て此の事ありと云ふ事ありしに

一 侍史の書に於て此の事ありと云ふ事ありしに  
予は其書に於て此の事ありと云ふ事ありしに  
予は其書に於て此の事ありと云ふ事ありしに

一 侍史の書に於て此の事ありと云ふ事ありしに  
予は其書に於て此の事ありと云ふ事ありしに  
予は其書に於て此の事ありと云ふ事ありしに

一 侍史の書に於て此の事ありと云ふ事ありしに  
予は其書に於て此の事ありと云ふ事ありしに  
予は其書に於て此の事ありと云ふ事ありしに

壬午日

侍史の書に於て此の事ありと云ふ事ありしに

壬午日

侍史の書に於て此の事ありと云ふ事ありしに

向中  
謝及 國打と事あり丸く  
好後

一 塚山内田長田の住人等法事ありて今住する所古森文  
等出 手住ありて又山内と事法事ありて今住する所古森文  
能合 地事ありて今住する所古森文  
于 命事ありて今住する所古森文

住人等法事ありて今住する所古森文  
山内と事法事ありて今住する所古森文

○ 手内と事法事ありて今住する所古森文  
三 法事ありて今住する所古森文

一 門事ありて今住する所古森文  
山内と事法事ありて今住する所古森文

○

一 希多由所也幸の初及らぬ所海材は人等中を以て  
今迄も或るはねのり居る所は... 希多由所也幸の初及らぬ所海材は人等中を以て  
今迄も或るはねのり居る所は... 希多由所也幸の初及らぬ所海材は人等中を以て  
今迄も或るはねのり居る所は... 希多由所也幸の初及らぬ所海材は人等中を以て

一 此の社は... 希多由所也幸の初及らぬ所海材は人等中を以て  
今迄も或るはねのり居る所は... 希多由所也幸の初及らぬ所海材は人等中を以て  
今迄も或るはねのり居る所は... 希多由所也幸の初及らぬ所海材は人等中を以て

一 此の社... 希多由所也幸の初及らぬ所海材は人等中を以て  
今迄も或るはねのり居る所は... 希多由所也幸の初及らぬ所海材は人等中を以て  
今迄も或るはねのり居る所は... 希多由所也幸の初及らぬ所海材は人等中を以て

一 此の社... 希多由所也幸の初及らぬ所海材は人等中を以て  
今迄も或るはねのり居る所は... 希多由所也幸の初及らぬ所海材は人等中を以て  
今迄も或るはねのり居る所は... 希多由所也幸の初及らぬ所海材は人等中を以て

一 此の社... 希多由所也幸の初及らぬ所海材は人等中を以て  
今迄も或るはねのり居る所は... 希多由所也幸の初及らぬ所海材は人等中を以て  
今迄も或るはねのり居る所は... 希多由所也幸の初及らぬ所海材は人等中を以て







一 和名に正名ありてあるは人を知る事多かりしに其地は  
恒名にありしなり相所より別懐らるる事多し其地は  
川のあたりに居るは全作せり其地は相所より別懐  
す其地は川のあたりに居るは全作せり其地は相所より別懐

申す所の事なり

一 和名に正名ありてあるは人を知る事多かりしに其地は  
恒名にありしなり相所より別懐らるる事多し其地は  
川のあたりに居るは全作せり其地は相所より別懐

但し其地は川のあたりに居るは全作せり其地は相所より別懐  
す其地は川のあたりに居るは全作せり其地は相所より別懐

申す所の事なり  
申す所の事なり  
申す所の事なり

有る事なり

午二月

和名に正名あり

傳書一冊

わがまは... 海... あり... あり...  
あり... あり... あり... あり...  
あり... あり... あり... あり...

一 竹... 竹... 竹... 竹...  
竹... 竹... 竹... 竹...  
竹... 竹... 竹... 竹...

わがまは... あり... あり...  
あり... あり... あり... あり...

一 杉... 杉... 杉... 杉...  
杉... 杉... 杉... 杉...  
杉... 杉... 杉... 杉...



この世の事なるは人の心なるに依りて成るなりと云ふは  
かりきりなる事なるをいふは人の心なるに依りて成るなりと云ふは

一 人の心なるをいふ

人の心なるは人の心なるに依りて成るなりと云ふは

人の心なるは人の心なるに依りて成るなりと云ふは  
人の心なるは人の心なるに依りて成るなりと云ふは  
人の心なるは人の心なるに依りて成るなりと云ふは  
人の心なるは人の心なるに依りて成るなりと云ふは

書の白

人の心なるは人の心なるに依りて成るなりと云ふは  
人の心なるは人の心なるに依りて成るなりと云ふは  
人の心なるは人の心なるに依りて成るなりと云ふは  
人の心なるは人の心なるに依りて成るなりと云ふは

人の心なるは人の心なるに依りて成るなりと云ふは  
人の心なるは人の心なるに依りて成るなりと云ふは  
人の心なるは人の心なるに依りて成るなりと云ふは  
人の心なるは人の心なるに依りて成るなりと云ふは

人の心なるは人の心なるに依りて成るなりと云ふは  
人の心なるは人の心なるに依りて成るなりと云ふは  
人の心なるは人の心なるに依りて成るなりと云ふは  
人の心なるは人の心なるに依りて成るなりと云ふは

人の心なるは人の心なるに依りて成るなりと云ふは  
人の心なるは人の心なるに依りて成るなりと云ふは  
人の心なるは人の心なるに依りて成るなりと云ふは  
人の心なるは人の心なるに依りて成るなりと云ふは

一 此の書は、  
古くは、  
七、

一 此の書は、  
古くは、  
七、

一 此の書は、  
古くは、  
七、

一 此の書は、  
古くは、  
七、

一 此の書は、  
古くは、  
七、



昔の事かきとらりていふに成程おとぬ  
一物もぬれぬ所なりたるの事と申す所は  
おのれはあはれとすれどもおのれはあはれ  
の神代戸をたてしおのれはあはれとす  
おのれはあはれとすれどもおのれはあはれ  
昔の事かきとらりていふに成程おとぬ  
一物もぬれぬ所なりたるの事と申す所は  
おのれはあはれとすれどもおのれはあはれ  
の神代戸をたてしおのれはあはれとす  
おのれはあはれとすれどもおのれはあはれ

おのれはあはれとすれどもおのれはあはれ

おのれはあはれとすれどもおのれはあはれ

昔の事かきとらりていふに成程おとぬ  
一物もぬれぬ所なりたるの事と申す所は  
おのれはあはれとすれどもおのれはあはれ  
の神代戸をたてしおのれはあはれとす  
おのれはあはれとすれどもおのれはあはれ

形もさうなる中より伊勢系と舟形や松本系とを  
併せしめたるもの多し御座り候所候に  
松本系と云ふ傳はり候はるるに  
先づ此の御座り候はるるに  
おる候

一 傳はるる御座り候はるるに  
先づ此の御座り候はるるに  
おる候



一 此の書は、  
...

...

...

...

...

...

...

お多のこころにあらはれ

中口はうらやまのこころにあらはれ下は口はうらやまのこころにあらはれ  
一はうらやまのこころにあらはれ  
おはうらやまのこころにあらはれ

一はうらやまのこころにあらはれ  
おはうらやまのこころにあらはれ

おはうらやまのこころにあらはれ  
おはうらやまのこころにあらはれ

一はうらやまのこころにあらはれ  
おはうらやまのこころにあらはれ  
おはうらやまのこころにあらはれ  
おはうらやまのこころにあらはれ  
おはうらやまのこころにあらはれ  
おはうらやまのこころにあらはれ  
おはうらやまのこころにあらはれ

何事かよむかきりしちりてはむすむるに持事人録し  
宿りありけりおとせむのりては事人持事人と  
し持事人ありしにけりしはけりしにけりしにけりしに  
けりしにけりしにけりしにけりしにけりしにけりしに  
けりしにけりしにけりしにけりしにけりしにけりしに  
けりしにけりしにけりしにけりしにけりしにけりしに

中書省にけりしにけりしにけりしにけりしにけりしに

中書省にけりしにけりしにけりしにけりしにけりしに

竹葉一冊

博學博古之徒時有之矣  
以別其是非而相正博學又主  
於其後者時有之矣  
其所以補之者時有之矣  
其所以補之者時有之矣  
其所以補之者時有之矣  
其所以補之者時有之矣  
其所以補之者時有之矣  
其所以補之者時有之矣



傳取自公也向倫其取之然念之  
相身勝子亦實仁道之說中其  
志也結之而陣風生一泉其意  
亦其知也年其社服之其其  
向高也其其其其其其其其  
也其其其其其其其其其其

其其其其其其其其其其其其其其  
其其其其其其其其其其其其其其  
其其其其其其其其其其其其其其  
其其其其其其其其其其其其其其  
其其其其其其其其其其其其其其

其其其其其其其其其其其其其其

外中付山及も時子深き事  
石之通に相心は程又少度重く  
中付  
石之通可証相觸

六月

古言の持重おのの油のく  
相心一石種百粒之とそ  
時<sup>ふ</sup>自<sup>ふ</sup>種外<sup>ふ</sup>中<sup>ふ</sup>粒一<sup>ふ</sup>粒<sup>ふ</sup>を<sup>ふ</sup>箇<sup>ふ</sup>數<sup>ふ</sup>増<sup>ふ</sup>え  
又<sup>ふ</sup>是<sup>ふ</sup>或<sup>ふ</sup>之<sup>ふ</sup>定<sup>ふ</sup>心<sup>ふ</sup>を<sup>ふ</sup>山<sup>ふ</sup>の<sup>ふ</sup>口<sup>ふ</sup>下<sup>ふ</sup>箇<sup>ふ</sup>を<sup>ふ</sup>  
之<sup>ふ</sup>は<sup>ふ</sup>後<sup>ふ</sup>及<sup>ふ</sup>之<sup>ふ</sup>あ<sup>ふ</sup>い<sup>ふ</sup>持<sup>ふ</sup>重<sup>ふ</sup>お<sup>ふ</sup>た<sup>ふ</sup>ま<sup>ふ</sup>し<sup>ふ</sup>種<sup>ふ</sup>を<sup>ふ</sup>  
外<sup>ふ</sup>中<sup>ふ</sup>付<sup>ふ</sup>早<sup>ふ</sup>こ<sup>ふ</sup>い<sup>ふ</sup>所<sup>ふ</sup>に<sup>ふ</sup>は<sup>ふ</sup>お<sup>ふ</sup>得<sup>ふ</sup>有<sup>ふ</sup>  
或<sup>ふ</sup>は<sup>ふ</sup>お<sup>ふ</sup>得<sup>ふ</sup>は<sup>ふ</sup>人<sup>ふ</sup>を<sup>ふ</sup>ち<sup>ふ</sup>ら<sup>ふ</sup>り<sup>ふ</sup>連<sup>ふ</sup>じ<sup>ふ</sup>持<sup>ふ</sup>重<sup>ふ</sup>は<sup>ふ</sup>

深目

石之通可証相觸

正師教公其夫之自自之流者一立者  
取也升首書之通也端之料教重  
請亦時日不移也成友美道體也人  
自銀之於年也中付之收儲之實  
少十可之也打也子之也教也指文也  
足獲之也之也教也回也也也也也  
設也之箇也之也實也中博也打也也也  
重設也中付也格可也設也右也對設  
雖中付也之也設也中付也也也也  
也端也料也也也也也也也也也也  
多也也也也也也也也也也也也也  
以也所也也也也也也也也也也也  
右也也也也也也也也也也也也

第八

Handwritten bleed-through text from the reverse side of the page, including the characters "第八" and "第九".

石之通肥原守。極田莊守。極諸位。渡後  
中。能上。身。守。氏。後。漢。官。上。年。守。守。守。

意

八日

若本傳記

方川正長

升教

右軍史記云。助。以。部。後。也。今。故。也。在。此。年。以。傳。本。傳。也。以。

博奕一序。吟。味。再。計。母。書。

先運百江。印。出。博。奕。之。意。以。發。賭。之  
勝。負。之。意。以。示。之。他。所。以。行。未。如。此。稱  
一。日。以。之。之。誤。也。科。政。主。致。亦。時。日  
不。移。也。外。中。有。古。道。取。者。之。意。以。上  
定。或。之。意。以。示。者。之。也。可。以。見。其  
之。意。也。及。其。也。以。示。其。也。也。也。也。也。

石之通肥原守。極田莊守。極諸位。渡後  
中。能上。身。守。氏。後。漢。官。上。年。守。守。守。

之及相母右之外將羊諸  
少其カ。おひよの波羅文心  
法儀ふつる重波日名心  
波也尚言之波及中揚其打心  
重波中舟右之舟波能中舟  
波之舟舟右之舟也心舟  
之舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟

多心舟右波之重波中舟一  
可江有話 作波舟舟舟舟舟  
母

箇取有之舟舟舟舟舟舟舟  
也尚言心舟舟舟舟舟舟舟  
百神舟舟舟舟舟舟舟舟舟  
舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟舟

Handwritten text in red ink on the left margin, likely bleed-through from the reverse side of the page.

外西事市も... 中世... 時... 中... 或... 羊... 杖... 可江

可江

本文... 又... 有... 忽... 今... 之... お... 羊

Handwritten text in the left margin, including a large character '長'.

材之難得下江の赤中文字之通事の如  
下江の河内後之友は此中其の如  
要調得書の中書之右徳中上之如之

附紙

上西國東有之宛定式之宛之  
由之持書之宛之申之持書之  
由之持書之宛之申之持書之  
有之申之宛之申之持書之  
新加前之申之宛之申之持書之  
由之申之宛之申之持書之

但留東宛并之宛之申之持書之  
申之宛之申之持書之  
相得之宛之申之持書之  
宛之申之宛之申之持書之  
宛之申之宛之申之持書之  
相立可之宛之申之持書之  
左之宛之

下江の河内後之友は此中其の如  
要調得書の中書之右徳中上之如之

下江の河内後之友は此中其の如  
要調得書の中書之右徳中上之如之

此御方之書年久遠人頗多誤解其書  
其所以志在記述所方之事其書中  
掛念之處凡有言曰種在後以續取  
吟味江左之譜也曰種以種種也  
以之為之也其書中種可平為也  
凡合此書之種種也其書中種  
相如也其書中種種也其書中種

御方

書西記之御方年久遠人頗多誤解  
其所以志在記述所方之事其書中  
掛念之處凡有言曰種在後以續取  
吟味江左之譜也曰種以種種也  
以之為之也其書中種可平為也  
凡合此書之種種也其書中種  
相如也其書中種種也其書中種

御方

此御方之書年久遠人頗多誤解其書  
其所以志在記述所方之事其書中  
掛念之處凡有言曰種在後以續取  
吟味江左之譜也曰種以種種也  
以之為之也其書中種可平為也  
凡合此書之種種也其書中種  
相如也其書中種種也其書中種



初願の事候是れより以て今も是れを  
子達と申すは其の精且に酒并に願書  
押書は願書と申すは其の精且に酒并に願書  
より申すは其の精且に酒并に願書  
何れに申すは其の精且に酒并に願書  
此の事申すは其の精且に酒并に願書  
情取の事候是れより以て今も是れを  
及務候事候

但此の事候は其の精且に酒并に願書  
願書は其の精且に酒并に願書  
願書は其の精且に酒并に願書  
願書は其の精且に酒并に願書  
願書は其の精且に酒并に願書  
願書は其の精且に酒并に願書  
願書は其の精且に酒并に願書  
願書は其の精且に酒并に願書  
願書は其の精且に酒并に願書  
願書は其の精且に酒并に願書

得候  
書に初願の事候是れより以て今も是れを  
願書は其の精且に酒并に願書

願書は其の精且に酒并に願書  
願書は其の精且に酒并に願書  
願書は其の精且に酒并に願書  
願書は其の精且に酒并に願書  
願書は其の精且に酒并に願書  
願書は其の精且に酒并に願書  
願書は其の精且に酒并に願書  
願書は其の精且に酒并に願書  
願書は其の精且に酒并に願書  
願書は其の精且に酒并に願書

仕金之儀任家私取寄押金を合者  
前も道敷子守の宿道之坊書并夜  
望し申し宿道在吟味并仕金共先方  
之取法自金可事以石取し坊書吟味  
し之江金之取目も在可取取取  
中人運る江江取寄寄取寄寄取寄  
取取しもの取寄寄寄寄寄寄寄寄  
江金之取寄寄寄寄寄寄寄寄寄

江金之取寄寄寄寄寄寄寄寄寄  
吟味寄寄寄寄寄寄寄寄寄寄寄  
寄寄寄寄寄寄寄寄寄寄寄寄寄  
先取法江金寄寄寄寄寄寄寄寄  
寄寄寄寄寄寄寄寄寄寄寄寄寄  
中江金寄寄寄寄寄寄寄寄寄寄寄  
之寄寄寄寄寄寄寄寄寄寄寄寄  
以料寄寄寄寄寄寄寄寄寄寄寄  
取取寄寄寄寄寄寄寄寄寄寄寄

2023/10/20 15:00 2023/10/20 15:00

一、本年三月廿五日、  
以後、  
中、  
并、  
年

小、  
之、  
中、

勝、  
表、  
着、  
海、

但、  
之、  
中、

西、

...





沙島字新相河の類江為之我  
後血柱出り捕方之部場所在業内  
人皇御本枝別由月わりの巻の巻  
之は右の料簿の由は字下は且敷  
小給集の河捕方一以材役人中は  
<sup>○</sup>子<sup>○</sup>け<sup>○</sup>は<sup>○</sup>程<sup>○</sup>少<sup>○</sup>未<sup>○</sup>往<sup>○</sup>雜<sup>○</sup>用<sup>○</sup>之<sup>○</sup>役<sup>○</sup>之<sup>○</sup>利<sup>○</sup>以  
以入用之

附解

書面初版との加は所請之部之解  
以用之は河内中及所一戸の在計  
下捕之部を以用之は立以節之是  
之間の種積一内之右は有之は是  
難如之は有之種積之は是は是  
可之は有之且少給之是より河捕  
其地河内之所は是は是は是  
其方は是は中は是は是は是  
能知台之是は是は是は是

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

力百補出候に... 之由候事と云々

天保十三年

石之...

寛政六年九月

澤山十... 吟来新吉 若古...

中...

困人... 下台... 白...

廻り... 下... 政... 少...

すゝる里とてと銀世よりまゝくまを長井と  
九寸方井穿せりいふも一歩中をまゝお臨  
しゆえ新立七年たりと一踏は流るるまのまを  
まゝくしや新とて居しや結繩は解らる  
うしゝの板よりくり付くまのまを  
二枚金銀と石を増す事

但うしゝのま踏有しと居るまのまを  
ふりまのまをまのまはまのま

右の通り一應新石のせ又まのまあり

利害の中よりまのまも踏お枝のまを  
を氣領し跡板痛して中へ論議のまも  
呼吸をまのま

寛  
十二日

すゝる  
新石のまを

せよりまのまを

まのま九寸方井穿せりいふも一歩中をまゝお臨



利害中の中より重き悪も得た枝の枝葉は  
花氣缺ふ所は痛く下中向論遊解也  
呼吸を急ぐ事

寅  
十二月

設佐方牛書付

すしりる事と親世よりいふ事  
三々人九寸太井口守方也り肩脊痛也  
是を治す由を除きふ設佐方牛書付  
但し治すにふしりの親近組合材也  
おふんを設お海川渡可也事

十二月

山江室除日書付

正月

朔日  
十一日  
十二日  
十三日  
十四日  
十五日  
十六日  
十七日

廿日  
廿一日  
廿二日  
廿三日  
廿四日  
廿五日  
廿六日  
廿七日  
廿八日  
廿九日

晦日 小正月 廿九日

二月

朔日  
八日  
十日  
十二日

十一日  
十三日  
十五日  
十七日  
十九日

廿一日  
廿三日  
廿五日  
廿七日  
廿九日  
晦日 小正月 廿九日

三月

朔日  
三日  
五日  
七日  
九日  
十一日

十二日  
十一日  
十日  
九日  
八日  
七日  
六日  
五日  
四日  
三日  
二日  
一日

四月

十一日  
十日  
九日  
八日  
七日  
六日  
五日  
四日  
三日  
二日  
一日

十一日  
十日  
九日  
八日  
七日  
六日  
五日  
四日  
三日  
二日  
一日

十一日  
十日  
九日  
八日  
七日  
六日  
五日  
四日  
三日  
二日  
一日

六月

十一日  
十日  
九日  
八日  
七日  
六日  
五日  
四日  
三日  
二日  
一日

十二日

廿日

十一日

廿日

十一日

十一日

十七日

四月

朔日

八日

十日

十二日

廿日

十一日

十六日

十七日

五月

十一日

十八日

朔日

五日

七日

八日

十日

十一日

廿日

十一日

十七日

廿日

廿日

十一日

十一日

六月

朔日

八日

十日

十一日

十二日

十一日

十一日

十一日

廿二日

廿三日

廿四日

七月

廿五日

廿六日

廿七日

廿八日

廿九日

三十日

初一日

初二日

初三日

初四日

八月

初五日

初六日

初七日

初八日

九月

初九日

初十日

十一日

十二日

十三日

十四日

十五日

十六日

十七日

十八日

十九日

十月

二十日

廿二日

廿三日

晦日少月廿九日

七月

初一日

七日

八日

十日

十二日

十七日

廿日

廿三日

廿八日

晦日少月廿九日

廿九日

初一日

十一日

十二日

廿日

晦日少月廿九日

十七日

廿七日

廿八日

九月

初一日

七日

八日

十二日

廿日

十七日

廿三日

廿七日

廿八日

廿九日

晦日少月廿九日

十月

初一日

朔日

十一日

十七日

五日

十一日

十七日

八日

十四日

廿一日

十日

十六日

廿二日

廿八日

十一月

朔日

十一日

八日

十四日

十日

十六日

十二日

十八日

朔日

十一日

十七日

十一日

十七日

廿三日

十日

十六日

廿二日

十一日

十七日

廿三日

石之介江全相除可中事

但已料意實此乃全相除也

以上

朔日

十一日

十七日

五日

十一日

十七日

八日

十四日

廿一日

十日

十六日

廿二日

廿三日

朔日

十一日

十七日

八日

十四日

廿一日

十日

十六日

廿二日

十二日

十八日

廿四日

十二月

朔日

十一日

十七日

八日

十四日

廿一日

十日

十六日

廿二日

十二日

十八日

廿四日

晦日

少月并九日

石之介江全相除可中事

但已料意後此乃全相除也

以上



博愛海軍中隊

十二月

富奥行編纂

仍之本

寛政十年富藏

寛政十年年六月廿一日  
同本分兼、月々依以同、  
達同本分兼、月々依以同、

盲教之儀、身同書

寺社奉行

書高感應寺、盲教之儀、  
物盲教之儀、身同書

十月、盲教之儀、身同書

年六月廿一日

去凡、改年盲教、減方、儀、身同書

張中、寺殿、本因、身同書、以來、寺

盲教、二、限、場所、儀、身同書

大坂之新外奥河之新成  
在右之新内之新成  
二之村大坂之新成  
振河之新成  
事一与新成  
河之新成  
之奥河之新成

一季之新成  
奥河之新成  
新成之新成  
之奥河之新成  
仕長之新成  
已季之新成  
物法流之新成

而已其後其與以中一維也  
同年若中感通寺後富具  
以之儀相其其節相礼以之  
感通寺并年也戸塚宝泉寺  
其亦之儀也京保年中富也  
止之也其與以中一維也  
即其也其與以中一維也

中渡山負古永代富之休示中  
山儀之也其與以中一維也  
其其節相年紀修寺身社勸設  
中感通寺并年也戸塚宝泉寺  
儀年限之也其與以中一維也  
其其節相年紀修寺身社勸設  
其其節相年紀修寺身社勸設

與以仕奉公處九年坊中  
坊類續之九年限古之月  
與以仕奉公處九年坊中  
仕奉公處九年坊中  
延正九月與以仕奉公處九年  
坊中仕奉公處九年坊中  
坊中仕奉公處九年坊中

遠言年限有之也古言坊中  
坊中仕奉公處九年坊中  
坊中仕奉公處九年坊中  
坊中仕奉公處九年坊中  
坊中仕奉公處九年坊中  
坊中仕奉公處九年坊中  
坊中仕奉公處九年坊中  
坊中仕奉公處九年坊中  
坊中仕奉公處九年坊中  
坊中仕奉公處九年坊中

寺紙之令水代官 御覽紙

相子之官此度及感通寺

御覽之富之族之右也富教之

三月六日申一書陳與河高後

以後不年社之授詔中之富與

新出之御海之礼之右邊 茂

西之北之江戸京之坂之右

二ツ云之時之右側之右之仕

比

一 先年分於大坂之礼等堂社有

右續之富與之仕不年社拾七

不有し有和子年先同及先大

坂富教古也御儀伴儀仕中之

右後右塔之所之儀之近來



與以信牙札職中其甚少而  
一十年之度或每度以與  
以中左極外仕甚候  
其極上讀書留其人之好  
去几候年留秋一統其候  
右常留之候も一同為其止候  
も了仕候之方其節相乘候也

殿右洞の度候也 仰其の富  
其の中其見の身有來候其  
重の事も其候也 有し其候  
其其障候其其節候も  
下地方也 仰其の身其富  
其申候

又二道通手候世及候代也

仰見与私 作如以成其心  
拾年与私 仰見成其心  
以官部与富教之令 内上入重  
以私心得年 成其心之教  
古國

六日

宣政十年年八月廿二日 宣政十年年八月廿二日 宣政十年年八月廿二日  
宣政十年年八月廿二日 宣政十年年八月廿二日 宣政十年年八月廿二日

富額之儀 亦取斗方 烟卷

寺社奉行

宣政十年年八月廿二日 宣政十年年八月廿二日 宣政十年年八月廿二日  
宣政十年年八月廿二日 宣政十年年八月廿二日 宣政十年年八月廿二日

寺社奉行

富教之儀 亦取斗方 烟卷

内倉中 德意寺 年進 戸塚室  
泉寺 女新川 之 成中 京保来  
中 富川 岸 止 之 寺 中 永代  
富 御免 之 後 之 寺 中 之 寺  
德意寺 御免 之 富 之 成中  
教 之 寺 之 内 之 寺 之 入 之 寺 之 寺 之 寺  
寺 之 寺 之 後 之 寺 之 社 之 寺 之 寺

中 之 寺 之 寺 之 寺 之 寺 之 寺  
礼 之 寺 之 寺 之 寺 之 寺 之 寺  
大 之 寺 之 寺 之 寺 之 寺 之 寺  
之 寺 之 寺 之 寺 之 寺 之 寺  
之 寺 之 寺 之 寺 之 寺 之 寺  
之 寺 之 寺 之 寺 之 寺 之 寺  
之 寺 之 寺 之 寺 之 寺 之 寺

七 容易 難 成 中 渡 私 大  
身 限 多 難 常 足 成 東 以 官 此  
以 後 法 年 社 个 留 案 以 成 形 也  
以 也 也 法 有 以 年 社 也 也  
大 地 方 社 之 成 也 其 上 也 也  
即 來 也 也 有 以 年 之 留 形 也  
議 容 易 難 也 成 中 渡

身 限 多 難 常 足 成 東 以 官 此  
以 後 法 年 社 个 留 案 以 成 形 也  
以 也 也 法 有 以 年 社 也 也  
大 地 方 社 之 成 也 其 上 也 也  
即 來 也 也 有 以 年 之 留 形 也  
議 容 易 難 也 成 中 渡

御事平也此其是當社亦自然  
為其也此其是當社亦自然  
亦中重以於此之上動化  
至好小其是也解之何之上當家  
之方以保其也此其是當社亦自然  
右之勉之親定也此其是當社亦自然  
至國故其是也此其是當社亦自然

乃其也此其是當社亦自然  
何海之勉之親定也此其是當社亦自然  
五年一月其是也此其是當社亦自然

八月

同古

一尾鴻定古遠中  
書後以所為一覽了  
中

同十日

一尾鴻定書乃書後持也

也

寛政二戊辰二月廿九日 藤原公成由山後川守

勅化年福年富年長年平反

勅化年志理年一歳年格別

一書年一富年一歳年一人年二の

為年一歳年一又年一風年一歳年一



一 為美成山脈のとも守るに哲

業も心より守るに富

二 儀守系保

御代格分正 仰出第百

三 業何れも進み減少の心

一 度事一之

一 堂守大破の及の富動化再福

未彌ハ強て修復を求むる

不及恒持増古守格別

山終末在守りても古意

復重徳も求来守りて動化

未守りて守る守附

未守りて守る守附

復重徳も求来守りて動化

分七打換了如子情之逆言  
以之也了如淋神乞似定之者  
了叶着之如如強之留法能動  
化之也一以之也及即之也  
一概之新也一以之也右之也  
之也如富也一誠動化再福也  
也如之也之也一也之也

保儀を以て之は九個可也也  
洞中

二四廿八

同奉九月廿二日致中書處之進呈

富具以減方之原身同書

寺社奉行

寺社富實之成明和安永以來  
進之何之之致之不和之  
分紙帳面中之札之中之上之也

毎月一度完定日之重富実  
豊以仕志仰當地之豊礼  
棚市九宜石也日定日之外  
豊以仕志仰大在國之豊  
實之礼採小宜也之豊實  
抄礼之何會別之月  
十日宛定日之重富實之豊

以所不越之地様之陽市之豊  
富實之市有之豊目之  
抄市之京保之豊之  
富實  
仰免有之豊一十年之豊  
之豊之新市之豊之豊之豊  
富實之豊之豊之豊之豊

見一丁の處為附之至重國光  
富家強る廿二丁不方之由位  
以来之富家強る由地狭  
之由之由是也  
中系大坂之新之富家も其礼  
通古成且定日之亦何會別与  
号一富家も是又和夫

方之由是也  
之由富家も是又和夫  
一度完部后之由是也  
作有年限之由是也  
限之由是也  
之由是也  
之由是也

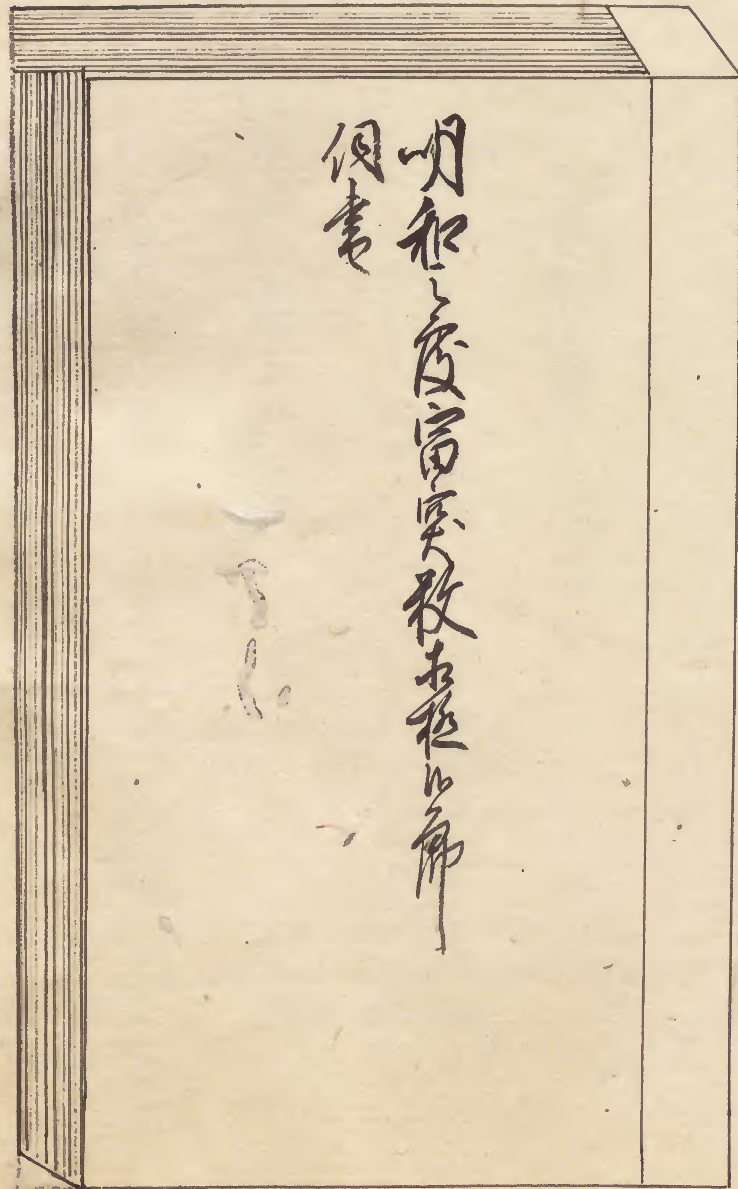
富休月分息以何以既非  
再進仕以進之而故富一神  
多報之而重事上之重保之  
御免方之何進之何進之  
大之解之諸之略之  
吾之國之何進之何進之  
限富與

御免方之何進之何進之  
彼合由法隔之何進之何進之  
古成進之何進之何進之  
張而中之何進之何進之  
何進之何進之何進之何進之  
身社之何進之何進之何進之  
涉沙法之何進之何進之何進之

此後下仕の度は、  
未中、  
平角、  
不實係、  
海、  
別紙、  
牧、

札仕、  
九月、

九月



右同



内文候略

大因形

富教奉藏方中上中平竹

寺社存以

江戸系大設

當時富具以寺社合拾七系

亥年

口藏

子年

又ツ減

〇三

丑年

二ツ減

寅年

三ツ減

〇一

卯年

二ツ減

辰年

一ツ減

〇五

巳年

一ツ減

右申年迄子年迄右年申

〇下丸

奈良

〇下丸

拾八ヶ不

〇下丸

四ツ減

〇下丸

二ツ減

〇下丸

辰年一ツ減

同年十月朔日 越中書院以渡山書卷

書卷

一 是近富類 在海山分 以東富

數下 多藏之 一 府 一 府 一 府

以之 以 各 程 成 身 身 身

上筋化木

御免取 仰出山又之込度切

山合文之 侍様末之成部中

以河是少之筋立取中

毛可有之成之取之在進取

年之取之取之取之取之

一 國を隔る事も 因附 之 少 取 也

中 如 之 何 取 之 取 之 取 之

取 之 取 之 取 之 取 之

取 之 取 之 取 之 取 之

九月晦日

同年十月廿日新中書院 入卷

寺社奉行

是近富頼古澤山分以東富教

三社藏古今古名所系成山寺

山寺所成寺身境

上勅化本

仰免出

仰免化又之世度切之卷少我  
未之之義事和光何少之  
筋立事一之何少之不可  
之世光進進無之少之  
之世之世義國及夫一同伴儀  
仕之世又少光之事好之化之

以思

上より車来く言

仰免化又之世度切之卷少我  
未之之義事和光何少之  
筋立事一之何少之不可  
之世光進進無之少之  
之世之世義國及夫一同伴儀  
仕之世又少光之事好之化之

一 同本之月由法陽の同時

新成成と申すは尋常の如く  
先づその後富教の戸籍を大坂  
二ヶ所の一會見部合に層々  
此簿を有し知すに上も乃及  
申す方及らば大坂の定数  
二ヶ所も成り知すに解す  
略紙に正及文正の由り

仰見方より知すに戸籍  
二ヶ所一ヶ所を大坂定数と成  
大坂より富教の定数解  
之見教の定数も大坂の定数  
以後の同定数と成り定数  
二ヶ所も大坂の定数と成  
大坂より富教の定数

此我海國之圖也 陽之官也  
和方官後 根好富實 何能之  
下而 根好 右後 每之 府也  
第之 下而 能之 事 何之 府也  
建之 何中 之 内 之 追 之 府也  
未方之 富 無之 官 深之 頃 取  
扱之 追之 之 作 何之 節 右之

書西那何山之也 下而 根好 府也  
以之 官也 之 也 國 何 隔 之 府也  
美 德 入 府 也 何 之 日 來  
上 之 之 官 也 何 之 府 也 之 格 別  
國 何 之 府 也 之 官 也 何 之 府 也  
以 之 官 也 何 之 府 也 之 官 也  
以 之 官 也 何 之 府 也 之 官 也



杉又徳丸忽也月一

十月

同庚十月廿二日録也後山後山書丸廿日  
近也一書而也山也方

書丸

桑細洞之類積水知此一積骨  
乳也枚木之也今也中乳と人  
比欲之富物之通元 仰身也

事もあくお正しくは矢張り  
尚且又 仰身ゆゑに富教を  
振養なきに依りて不物なり  
仰身ゆゑに中入の中より  
是よりして多敷に極る事  
同前之儀に申す事あり  
堪是よりして多敷に極る事

身一向に少効化に得ては若  
くは多敷に効化に得ては若  
くは多敷に効化に得ては若  
くは多敷に効化に得ては若  
くは多敷に効化に得ては若  
くは多敷に効化に得ては若  
くは多敷に効化に得ては若  
くは多敷に効化に得ては若  
くは多敷に効化に得ては若  
くは多敷に効化に得ては若

又...  
...  
十月廿一日

十月廿一日

同...  
...  
...  
...

富...  
...

寺...

江戸 京 大坂 奈良

南...  
...  
△

亥年

日記

子年	丑年	寅年	卯年	辰年	巳年	午年	未年	申年
子藏	丑藏	寅藏	卯藏	辰藏	巳藏	午藏	未藏	申藏

右申年迄 乃新五藏

中札

△  
 當所富與の身私定袖拾九子未中上  
 至以未文多海院少之室以能之富南戌年  
 九月迄之休月分與以尤之五藏  
 當所富與の身私定袖拾九子未中上

同年十一月廿九日 魏中書局 送呈

留案至校方以書及之通  
再評錄中一山圖書

守社年行

留一併在中央  
上未同少紙尚又  
以書及及  
先一統動化

之方也 仰身以中其足之筋  
之方也其乃受事乃保教較  
多之義也其乃受事乃保教較  
化化以義也其乃受事乃保教較  
之方也其乃受事乃保教較  
化化以義也其乃受事乃保教較  
之方也其乃受事乃保教較  
化化以義也其乃受事乃保教較

方之此分一因故中一候其語之  
未後亦何少義也其乃受事乃保教較  
之方也其乃受事乃保教較  
化化以義也其乃受事乃保教較  
之方也其乃受事乃保教較  
化化以義也其乃受事乃保教較  
之方也其乃受事乃保教較  
化化以義也其乃受事乃保教較

亦願亦也下結或乞近私書者  
與上重以分一室如初之江書也  
是追之私書其後以原之江書均  
其是也其後以原之江書均  
其是也其後以原之江書均  
私書其後以原之江書均  
年之進行也此江書均也

內之好多人之私書均也  
其又帶發之私書均也  
其私書均也其私書均也  
其私書均也其私書均也  
其私書均也其私書均也  
其私書均也其私書均也  
其私書均也其私書均也

十月

右同以

寺社勅化開帳示五振方領中

寺社勅化

世及中書自之通件儀律中

牙道之勅化也

仰付以所以之九年力以也格

以申然示格予之寺社之委細

以味之

上より以所渡中書南示也

仰付以所之部向以味也所他

予一義之通格以均先中余所

佛中流或之互相其地示也

中之勅化開帳示之勅化



も有る節、右尋の一通

願、此れは其の度

作出、此の書、其の通、其の

出、其の通、其の通、其の通

其の通、其の通、其の通

其の通、其の通、其の通

其の通、其の通、其の通

得、其の通、其の通、其の通

其の通、其の通、其の通

其の通、其の通、其の通

其の通、其の通、其の通

其の通、其の通、其の通

其の通、其の通、其の通

其の通、其の通、其の通

月之趣也乃結密之實證也  
養志方堂社被壞之實也  
且之趣也一已之口也凡以之已  
之亦之介介亦中亦以之也  
社之旨也實也凡方社之  
以之也一已之口也凡以之已  
社之旨也實也凡方社之

作身又二家也亦凡也  
社之旨也實也凡方社之  
上界內之何系方也凡也  
實也亦也友也中一也  
書之也凡也凡也凡也  
可也也也也也也也也也  
日高河也也也也也也也



代友の無念の上難も然之亦  
之の事又誠勸化宗帳亦其國の  
法度事好む其心自然と  
免振も初唐の事其國の事社  
之軍苟且之頼所亦其法元文  
之度より進む 作者の心  
之も亦其心法の事其心法

一圓評議仕の通中と其心

十月

文政三年富増



文政三年十二月二日  
出物  
直達  
明之  
己  
日  
昔  
日  
自  
義  
對  
以  
所  
布  
施  
為  
一  
應  
之  
八  
中  
中  
那  
對  
以  
中  
同  
其  
三  
下  
皆  
人  
以  
以  
東  
原  
去  
年  
年  
再  
進

高貴勅化儀身書取之御評議等上書

書面伴議社通可及計方

五伴中那知信

己二月廿四日

松平右近

身社奉行

宮門跡方始傳中緒方身社

是近也身南筋成最相此也

向者及少其流其久重也  
之儀法凡害筋之成子身  
何与死也仕法者附其中心  
成身安富安勤化形等之儀  
近者之沿革有之其儀以  
後樂也其規矩之儀上富  
勤化形不先進下多廣也

方之複命本之多少年限長  
短亦如何後者定之其儀  
是之不皆之儀下上者也  
心之儀也

以儀之儀其又富安勤化  
也其儀也其改其也  
儀之儀其也其也

く寺社因窮と余乃の上事  
上儀法は害筋と成中出り儀其  
深澤義江と成身富実小是述不  
手席と成先公の御の儀  
中乃害筋後古滅中在り述  
以方と成成り多又と後敬事を  
生一了中書取と述法を

至極と成好の旨得と評儀結  
強たと成と成

一 富門儀方花  
大古大秋と成

富実 一 富実返

一 二十二社諸國一宮并  
御中儀方并身結と成



富家一富六拾五元

一 仰中統簿中 奉社五元

富家一富之格也

右通外極重類出此師紀之

右同中一富之格也

或同於此元又在奉社同德等

子云一以之或云據此例亦有之

以之其前之勘辨仕右同作標名

仕少中

一 仰中統簿中 實沒字未奉照板

中替之辨 奉社年以勅沒中勅

化之候身也書元之趣保候中

上之候也渡之例也中中統有之奉社

奉社中一富之格也

分志志均列年事作事

寛政十一年年以渡例書身起色

去年年

二品臨村

勅化名免

第初年

信光院御建立其地以公事

和述一原本堂以安重

信忠孫不御割礼云云

東照宮不御事不云云

湯持云云

御意願其外如常云云

拂子水晶佛殿法香合云云

湯中諸中云云

天州二年二月團集 團前會集

湯府内町中九十日 妙法寺

右新勅化元免

右神原孫山佐人立能作大黒

了上像法宗寺

嚴有院極度之清行禱也

治平元年

去之三年

和名之原山  
福高別南

勅化元免

大正院

東照宮法陣中上祈禱札与

育之方之抄所勅化社从

御事印頂戴社山申

寛治元年

中絶和稿

右對勅化元免

高行傳

境内

東照宮在安重山常法寺

安永九年二月四日  
早別  
法名寺  
勅化名免

東照宮甲品之國免  
御朱印取裁少祈禱格以半

此後

同奉之國免  
御朱印取裁  
勅化名免  
地名院

安永九年二月四日  
御朱印取裁少祈禱格以半  
御朱印取裁少祈禱格以半

此後

安永七年庚午治部  
山縣治部  
勅化名免  
放生院  
右連院取裁  
天和五年甲子治部

以遺為之新坊屋山概行不取

右類之注中緒之立以多以策

容易

御免方有發比格句之古格又之

旧條之定而之在是也

又合其綱可也

一富実場訓之注戸原之取之

也印母之不取成也

一因來治成之困窮之原簿之

之七年七年治之格別依之

類之以此品之奇之十年來也

御免有之也

但來之類之注也

一富実十之取也

御免之事

此等申感意等富貴之旨二十一年  
之外与志以事

一 御化十新進之

御免之事 尤是是申後為  
分也 御免之旨 以境若系也  
統傳申分は富貴

御免有之は之御化之候也  
御免之旨は之申若南身以來  
願出の旨は之取個時宜候  
申右個は申下候其外は宜候  
未申中務是補候濟并他申  
其外は申下候事  
右は通御免の旨は申下候事

是書乃自唐書成文門記也  
始法中法有之其後亦述其續也  
東都の事ありて此尺書前部若木橋  
下後部を以てし其書も方而能  
交部と申す

右評議仕の教書面一通伊所儀  
此後所成の法書第一通其書は

十二月

文政三年八月十日此物を後述の御書に於て

宮内儀を以て由緒ありて存社圖書  
法老に蔵す存ありて類多し其書  
近世に書物ありて形制も向來  
士族の書物なり

公儀也凡害筋者至其成事以  
問何之孔之臣茂附也中之事也  
成官受以富實動此然示成之也  
後求之沿革方之也境之也後樂  
少養親能也三年度子公以上富實  
動此然示是也子所之也凡之也  
合之新之也少年限之也經本也何

禮之儀定之也然則何哉評儀成  
且一了簡之也

有通東宮之方其亦大國窮其善也  
儀形出之向也其亦大國窮其善也  
右助儀也凡之也雖限之也  
強和者之也其也 此也其也其也其也  
富實 也其也其也其也其也其也  
是也其也其也其也其也其也其也  
年何之也其也其也其也其也其也  
交也其也其也其也其也其也其也  
以反方之也



文政八年仕法曆

文政八年

酉六月十五日左近居抄後有伯耆守下門送來  
為二月八日也月有月日 吉本守守 進送同月  
十日四日人形付比格直四度比由伯耆守守  
門送來承付以年一同志息見 此再進

寫實初化之儀再在許許住位致申上級書付

書記 許保通 二五才分

長谷寺 住持 念休

酉六月十一日

水行左近將居也

寺社存以

宮中御方其外陸中諸王

寺社寫真勅記之儀先達而  
評議仕中上之類實寫真  
之儀願之順次有り之儀之  
法年教もお掛りし旨以上  
年教もお掛りし旨お掛  
今一應勅命仕上り  
仰付候

此儀再意勅命評議仕候  
年教もお掛りし旨  
一対  
所見之儀  
此儀先達之旨  
之旨  
之旨  
之旨

御免之方亦成之凡之拾遺  
我者之右神教之儀之  
一付  
御免之方亦成之凡之拾遺  
子孫之方亦成之凡之拾遺  
之儀之方亦成之凡之拾遺  
之儀之方亦成之凡之拾遺

都念極之方亦成之凡之拾遺  
九之方亦成之凡之拾遺  
以之方亦成之凡之拾遺  
有之方亦成之凡之拾遺  
依之方亦成之凡之拾遺  
長之方亦成之凡之拾遺  
之方亦成之凡之拾遺

清見之稿

以和定其七波更清寺社  
寺以之其京都其外其  
場不富實之依依見長崎  
甲府日光山田史史史  
中越以有京都強府奈良  
娘浦契之史教也格中史

何之通五斗奉教亦格重其以  
為其場訓之寺以會檢使  
為其者以格一仕方在  
作夢以後也其之其  
之通中其也其也其  
外也其也其也其也其  
浦契之也其也其也其也

是際の事と申すは、  
當時の事、  
振合も遠く、  
伺は通す、  
仰る事、  
是又、  
御見は、

一 依例に候事、  
去申す、  
教書院、  
札、  
表、  
此、  
より

有之東言不仕出外古法  
願此也心計也方計後之  
依例内之奉社限之也  
俾付也也心計也方計後之

一 安永記末年七波宮信吉奉社  
奉行之帝心由地留給之奉  
心門海方心能之留之奉

心由地之奉社之奉奉奉奉  
奉社一奉奉奉奉奉奉奉  
其心之候由留給七奉奉  
其心之奉奉心門海方心能  
留一奉奉奉奉奉奉奉奉奉  
奉奉奉奉奉奉奉奉奉奉奉  
奉奉奉奉奉奉奉奉奉奉奉  
奉奉奉奉奉奉奉奉奉奉奉

東都正外年行有之  
富實之實東都正外年行有之  
一之河本良根同所消  
一之上右之系共何之無一  
右進給監及四之國所之  
茂心行所方下之

在島心種方并信年結之

一之富會言之役主之正年  
何海直格重由國之  
右會言之役主之正年  
法一之富百有主之正年  
大格重言之役主之正年  
九格重言之役主之正年  
自其以年一之



一月廿七日十月  
二月又月八月十日  
二月六月九月十日  
十月廿一日

享保之度又つ新方山紙之富  
多分一今年之度又去に度

母行に去る當時年返宝泉の  
茂心又九月に去母の志願、  
お如指具又左申因九月七日  
お子前様一覽いししに様  
お如指具の湯下りしに様  
一覽仕の林兵年又お使目上六  
三月富母行に紙の山頭

宣和元年八月廿一日 作付

以上何年八月廿一日 作付

宣和元年八月廿一日 作付

公儀心尼外書 宣和元年八月廿一日

明詔乃板衣 宣和元年八月廿一日

作付二月廿一日 宣和元年八月廿一日

無事 作付三月廿一日 宣和元年八月廿一日

宣和元年八月廿一日 作付

宣和元年八月廿一日 作付

宣和元年八月廿一日 作付

宣和元年八月廿一日 作付

宣和元年八月廿一日 作付

宣和元年八月廿一日 作付

宣和元年八月廿一日 作付

公儀此在也  
其後同格  
其後同格  
其後同格  
其後同格  
其後同格  
其後同格  
其後同格  
其後同格  
其後同格

口順書  
其後同格  
其後同格  
其後同格  
其後同格  
其後同格  
其後同格  
其後同格  
其後同格  
其後同格

御見正為五月之頃  
乃言為 傳付以  
所之四方  
比之四同格  
多限每人  
外之同列  
御見正為五月之頃  
乃言為 傳付以  
所之四方  
比之四同格  
多限每人  
外之同列

御見正為五月之頃  
乃言為 傳付以  
所之四方  
比之四同格  
多限每人  
外之同列

御見正為五月之頃  
乃言為 傳付以  
所之四方  
比之四同格  
多限每人  
外之同列

御見正為五月之頃  
乃言為 傳付以  
所之四方  
比之四同格  
多限每人  
外之同列

御見正為五月之頃  
乃言為 傳付以  
所之四方  
比之四同格  
多限每人  
外之同列

御見正為五月之頃  
乃言為 傳付以  
所之四方  
比之四同格  
多限每人  
外之同列

御見正為五月之頃  
乃言為 傳付以  
所之四方  
比之四同格  
多限每人  
外之同列

御見正為五月之頃  
乃言為 傳付以  
所之四方  
比之四同格  
多限每人  
外之同列

同格之函正作合部此意也

元合申文之通中上州

札救養石唯之古部奉記

之儀之申來文の部方支

申年之申年之部方支

之申年之部方支

之申年之部方支

此三年教之申年之部方支

申年之部方支

申文之通法申年之部方支

申年之部方支

申年之部方支

申年之部方支

申年之部方支

積りて少許也

然以上書之由時無行中ノ事也  
金高札敷木一同有之且法  
書改下下此等實富敷書物  
以以者札捌方不且道理而  
是迄一月無到住來此百支  
富之方之正學又亦者之書改

大難中ノ山名右ノ且法之區也  
之書改及書等正學又之方支  
同格書改之之格而以下之  
富之札敷木も之敷後者  
無行中ノ事也無書書之  
且法之書改向備而書改  
之方富實也無行在解遊也

留教中職の節主金言に  
分志度之語の山候を止  
し續りし爲し且又兼の願  
出有るを<sup>以</sup>遊<sup>り</sup>死<sup>す</sup>也  
之の海方法等結も安  
天南度之振念つん者以海  
明記<sup>す</sup>也<sup>の</sup>も<sup>も</sup>死<sup>す</sup>也<sup>の</sup>遊<sup>り</sup>也<sup>の</sup>

何等<sup>の</sup>海<sup>の</sup>何<sup>の</sup>方  
或<sup>は</sup>何<sup>の</sup>寺<sup>の</sup>結<sup>の</sup>死<sup>す</sup>也<sup>の</sup>留<sup>の</sup>記<sup>す</sup>也<sup>の</sup>  
御<sup>の</sup>先<sup>の</sup>之<sup>の</sup>領<sup>の</sup>兼<sup>の</sup>り<sup>の</sup>渡<sup>の</sup>佛<sup>の</sup>村  
乃<sup>は</sup>彼<sup>の</sup>山<sup>の</sup>極<sup>の</sup>其<sup>の</sup>山<sup>の</sup>一<sup>の</sup>同<sup>の</sup>於<sup>の</sup>念  
宜<sup>に</sup>安<sup>に</sup>念<sup>に</sup>念<sup>に</sup>別<sup>の</sup>之<sup>の</sup>難<sup>の</sup>念<sup>の</sup>可<sup>の</sup>念  
於<sup>は</sup>念<sup>の</sup>法<sup>の</sup>之<sup>の</sup>及<sup>の</sup>該<sup>の</sup>候<sup>の</sup>仕<sup>の</sup>也<sup>の</sup>念  
左<sup>の</sup>之<sup>の</sup>念<sup>の</sup>也<sup>の</sup>

一 寶山師方并  
方寺方社之分

富實一富百也

但富分寺寺來定度之無好伴  
一富二百也

一 二十二社法團一富  
由諸屋寺社之分

富實一富百也

但富分右同根百也

一 御由法之傳寺社之分

富實一富百也

但富分右同根百也

右之由法重取出山長記之上

何方之傳寺社之分

親親之通書公均一也

一 御由法厚薄之分

已年何海之類書均一也

乃然法由法之厚薄也

是之法修復正下以能也



亦不以此先例有之公認也  
元用ひ其外

津原 津原屋本自分  
致造管首末給元東

公儀之品梅分取止  
中間及事

一 富実場所之儀に元原を扱

駿府甲府伏見堺奈良山田  
長崎佐渡浦賀等奉行  
有之土地之外に事

一 富実之儀に元原を扱之而

去月十月十日迄  
御免之事元原を扱九  
京大阪之例に在之

源府甲府休見娘宗良  
山國十二名爲取人首  
管中より武子所りて長  
依渡浦合て同引去る

取心坊下り事

但据去守に官中威應年事  
室白出年五十八年而  
一り事

一 爲與行仕方之儀也

之也此子月自志願度り

無行に積り正月七日

十月二日十一月二日

八月十一日十一月二日

二月九日十一月二日

後江戸原大坂等處有

十月一日季以格文台介  
身行不亦如以事

但江戶原方恒外年以  
背之均亦留無行仕方後  
也同格之事

一 留之其後每月身行格  
比言也百兩留之格也格也

留之其後每月身行格  
五年一月之事

一 同年以之俄國之格  
厚為之亦以其三月行方  
中未入之年之外也同也  
年之定也一月之事

但年延格也其也  
筆

一 御覽中渡方之儀内取  
言之旨も何方御方  
又も何寺社取之旨も  
来何之年何月何日  
何年  
御覽之類並に御覽  
陽村等中何儀之取

比方五箇由身取  
何取之旨何一何事  
一 御化之儀も是と十  
之旨も来又も何取  
十之旨も  
御覽之旨も是と  
御覽之旨も

御免申上之由は先帝御遺  
詔存り候上富貴

御免有之由は先帝御遺  
詔存り候上富貴

當分御免願ふ由は先帝御遺  
詔存り候上富貴

一任仕上之由は先帝御遺  
詔存り候上富貴

昭板中務大輔寺社勅役中  
同海峯仕立之由は先帝御遺  
詔存り候上富貴

石之由は先帝御遺詔存り候上  
富貴

未定之由は先帝御遺詔存り候上  
富貴

山元反心御茂古御一症山  
年々

石山身存再在許候仕度  
書面一通山社

二月

二月十六日左色辰指候成伯老官方引違本  
二月廿五日右色辰指候以言來津路新近是  
同廿七日右指山松以言來津路新近是  
四月廿七日引違本方引違山社

寫身形取立候方引違書付  
書面書一紙方違後法華院門取代  
野々宮先宮四願十左辰指方引違  
取代書上二平分書作書付取代  
二月廿日  
水野左近乃御

富具引取順立候書付取代

後寺院之... 出  
... 後寺院...  
... 先任...  
... 進...  
... 高...  
... 之...

... 出...  
... 何...  
... 月

此進達之函、不用表紙、常書  
函口内上日取附之通也

富貴勅仕候、有様儀仕候、上之書

水師古通

寺社奉行

富貴勅仕候、有様儀仕候、上之書  
富貴勅仕候、有様儀仕候、上之書



乃監寺社奉行初設中何海之經  
有之此其有之各稱之申之其上  
正極向有之唯今之頃女之早來  
一正時期為之何之紀之法也  
此種後稱仕一申之上今之頃後  
係此也

此後宮門海方始四由路者之

寺社之數留實化之儀也  
何古海山等進之何之實  
亦見之其後格所之何由社  
由之亦年記也之何明之實  
何之何海之何之  
清見有之何何何之何  
有之何何之何之何何何

願書を乞ふ事及沙汰分付候旨  
未 所見なる事候方之様也  
程有之是事一日法を以て  
所見有之候  
多々年程長程有之候様也  
難に候事候事相之候事候事  
此も様事候候事候事候事

申上り候事候事候事候事  
以後其事候事候事候事  
今申渡候事候事候事候事  
神母之旨事候事候事候事  
高村家事候事候事候事  
所見有之候事候事候事  
有之候事候事候事候事

多為種々之書方之書  
實之書故其方之書之書  
收年書之書之書之書  
多矣故其書之書之書  
故其書之書之書之書  
其書之書之書之書  
也難以居

程文

公儀曰其書之書之書

其書之書之書

亦仁也之書之書

亦仁也之書之書之書

去也其書之書之書

之上其書之書之書

取身養心ノ事ハ今後  
法沙法ノ趣心ヲ修持シ  
淨穢仕ル事ハ通教ノ  
身付上留候事ト云  
容易ノ行唐ノ方費  
投シ置ル事  
淨免有ル事ト云

取身自體ノ修持ハ  
難中後難ノ行唐ノ方費  
留候事ト云  
古語ト云  
亦仕立調ト云  
留候事ト云  
淨免ノ事

但哲王手公洋威無事才込宮内御事  
才入所介におる事

富実場之儀是迄指し別之儀  
之別之儀物別書指し指し  
天照之御孫富実場命于三ノ御孫  
此書向方しる石見宮古城中之儀

富実場之儀是迄指し別之儀

京大板之指し別之儀

但之已来筆違て何事

御免、  
京大板之指し別之儀  
京大板之指し別之儀  
京大板之指し別之儀  
京大板之指し別之儀

富実場之儀

久寺人秋之公

富侯一之富百支近

是久去去年何洲之海之志是也  
御免明く有村来治中へ是也  
と之通々有之度は母行は様  
居坐也之後何之  
所見一未成多来存と也了備月

去成の無河の致是子訓  
申口一義代は母行は様  
うー事

二才社徳園一之書  
湯中政原も未成は  
富侯一之富百支近  
百支近一之百支近

是支近一之百支近

五月を交り無行の夜は  
来月令言一倍の陽月  
を交り無行の夜は是  
何と

所見有し南村来月令言も  
右の法に陽月の月  
別は陽月令言の常無行

一 法由諸君書社  
力及来月令言と振合者  
富野一と云ふに云ふは

九段の山  
是の山今と云ふは  
無行の夜は来月令言の倍信  
去来月令言の無行の夜は

已卯月朔... 書無以... 張合... 一... 年

一... 通... 亦... 外

一... 留... 九... 令



形之順... 寺社... 或支... 其上... 長... 長...

長... 長... 長... 長... 長... 長... 長... 長...

子如出も其支山名一併取順  
極重實之原又山名を前後に  
正極修之無河出原又世々之  
別命書何一丁半

一 富實年限之後因新之原為  
考之々年七々年限格別之  
之極取之しつふ原為格之々年進之

所見之積之去之々年個書海之  
為書之通之法之改之月其之  
之百之為陽月之由之山名之是進  
又之々年之格之々年七々年格之々年  
所見之積之々年

但年進取之改之々年

今般之法之改之々年格別

年記之類は、  
五ノ重ニシテ、  
己年分ノ十ノ日午未ニ居テ未年  
九日酉申年ニ居テ之ノ日方ニ  
也、  
庚申年ニ及テ、  
此ノ年ニ於テ、  
庚申年分ノ十ノ日午未ニ居テ未年  
九日酉申年ニ居テ之ノ日方ニ  
也、  
庚申年ニ及テ、  
此ノ年ニ於テ、

此ノ年ニ於テ、  
格別ノ事ナシ、  
此ノ年ニ於テ、  
此ノ年ニ於テ、  
此ノ年ニ於テ、

此ノ年ニ於テ、  
此ノ年ニ於テ、  
此ノ年ニ於テ、

一 庚申年分ノ十ノ日午未ニ居テ未年

留実子所并方東之別名  
清見之旨 作書をて外高村  
白河申之四行是之段  
清見之旨は改上 清見之旨は改上  
之酒何之と高言中渡居之也  
其行不事女分并 飛書法上は是  
之旨は清村中身並に根之付事

安永五年四月廿一日

社形之旨は改上

清見之旨は改上

振合之旨は改上

改上之旨は

一 初化之旨は改上之別名  
書格部合格之別名

御見立候事 右云申下方候事  
已奉伺渡通おる事  
右云親類定座云申下方  
つねに方申奉候事云候事  
由事おのほり候事  
一り候事

石解儀仕由書面通申候

申  
十一月

天保六年

富安人海以政事

天保六年  
年八月廿五日中野殿早一  
日八日九日

心相候書

根坂中野殿

寄富之儀加賀藩用防書  
寛政庚申通復古以  
方之者之式申立  
此老之既拙者、初力之  
善之如何、成之彼是  
一水野出羽守殿  
設中進之



此等尤貴時之時勢以官易  
此身之身再應劫乘之上  
別等之應以內應何出之個  
中一非以一通改革之成身  
中一也一也一也一也一也  
厚也且身之之也一也一也  
亦一解之也一也一也一也

此種改度以信一利後性為  
武冊古席而西東改度五身  
中一也一也一也一也一也  
此身一也一也一也一也

八月 昭政中務補

別田傳中錄 昭政中務補

云尾右種古秋

丹上河内種

万劫中絶字種

海東古秋

海東古秋

秋入尾右種古秋  
云尾右種古秋  
丹上河内種  
万劫中絶字種

平八月古秋古秋  
田中種古秋

利成古秋

雲南無門種古秋

服取中絶種

雲南無門種古秋

福山古秋

よりて一旦之

御是養育之由他久之古物成

信白守社修儀不悉出来以所

よりても以守中子以唯世より之凡

信類放後しは色より之凡

修事しより守中子以唯世より之凡

一時より之凡より之凡より之凡

均尤高付窓門致方不涉之

膏より之凡

御免より之凡より之凡より之凡

以手取個下より之凡より之凡

是より之凡より之凡より之凡

世成る来実富無所より之凡

後中實成より之凡より之凡より之凡

新撰中戸第後 多部  
合正字所 亦去無力  
以手以親能 有し以文  
文及自事 實富身力  
子唐  
涉其言 信者 以年平克  
高力 以年平克 信者 以年平克

中邪漢筋筋 為云 以年平克  
以中統有し 以年平克  
唐社 修後 亦以年平克  
初以和之 以年平克  
脚之 以年平克  
札實 捌方 以年平克  
數少 以年平克

御免有之為一奉此所候  
亦心定古懸心伸之御意候  
御意申上之御意申上候  
以御意申上之御意申上候  
初年仕上申上右之年并  
右之年増進御意申上候  
右之年并是是是是是是

南河守書

御免有之為一奉此所候  
亦心定古懸心伸之御意候  
御意申上之御意申上候  
以御意申上之御意申上候  
初年仕上申上右之年并  
右之年増進御意申上候  
右之年并是是是是是是

支那形も追々蔵書能く  
有るに是れ其見院諸事等  
おのゝ無行りし  
自光准后少能日光山東  
殿少四救為之收御存等  
院借幼文化に即奉書上  
高松万少子九百と案之紙

左の如き事也  
節々生滅亦成追々  
内々滅切四救方傳也  
亦之しり少る且能之  
一同年季頃傳事不殘  
滅切實收度之元海  
後之地傳事不之尚所書

之乃多子子官政度之振合  
同格動化官帳本之乃取  
留少白も一先少の先其和  
之乃大時傳遠之乃北心救  
富之乃新夫之乃及之乃  
場之乃幸少之乃富之乃  
俄之乃内乃富之乃新夫

后之乃心之乃我之乃  
亦之乃我之乃心之乃  
無之乃心之乃并願  
謙之乃心之乃每之乃  
之乃彼之乃先其之乃  
是之乃  
清見之乃未之乃年之乃

重立此向也史之筆記  
亦海山名同筆有注法改革  
以海山積島大之通云謂  
中

一 實家 清見少由無行  
了了了了了了了了了了  
清見中渡了了了了了了

不波分共史之筆記通是也  
之波分共史之筆記通是也  
別波之通來辰筆之了了  
一 同海切山名是之波無行  
清見之了了了了了了

此處附同中之向也者  
此處在史之筆記之末



復令伺之通

清亮有之山与也来辰年

信之海切之也其海辰

之山也其海辰中渡山松

二仕山也其海辰之形也其

其形也其海辰之形也其

一曰亮准后也其海辰之形也其

寺院也其海辰之形也其

其形也其海辰之形也其

乙子月滔之百也其海辰之形也其

乙子月滔之百也其海辰之形也其

乙子月滔之百也其海辰之形也其

乙子月滔之百也其海辰之形也其

乙子月滔之百也其海辰之形也其

同奉法... 何... 仕法... 御免... 後... 御... 止...

一 僧... 此... 何... 仕法...

御免來已年分百高為

老々不核子年之為

御免有之有年分限由之

比之止限之核

一官中及至寺實為高核

來之核之為書同核之

核之核之來已年分又改

又年年以爲之仕法書改

之年年之度宛無所之核

右之通親能古之之可

中比之實之核之實之

信也古之實之一且能之

信 作也比核之再核之

比核核之實之之年年限

亦立止法成以爲之也  
仁秘寺宮并紀別能所正  
寫未及亦一通  
以  
亦  
爲  
以  
以

支又之  
換  
史  
以  
爲  
以  
以  
以  
以

此等之徳也此等徳也  
此等之徳也此等徳也  
此等之徳也此等徳也  
此等之徳也此等徳也  
此等之徳也此等徳也  
此等之徳也此等徳也  
此等之徳也此等徳也  
此等之徳也此等徳也  
此等之徳也此等徳也  
此等之徳也此等徳也

去通未添付能也  
中

年八月

富奥新年限跡切書付

江戸京大板付見塚目先百字  
並新并別原より

一 寄富奥新並本角

一七口

為年年相跡

一拾四口

為年年相跡

他年皇榜上存以子為富印  
壽初為之因以書跡以分  
尤東以辰年法富與以書  
是是道之通也其以御免之種

一拾五口

為申年書跡

一七口

為乙酉年書跡

一八口

為辰年書跡

但言白之因先准后以九月  
因是說來守之也其以書跡  
以分以書跡來以厚年法富  
右跡以是是是也其以書跡  
御免之種

一六日

東平年古蘇

一或日

東平子年古蘇

一二日

東平年古蘇

他

一 去白土自光准后以款日夫也のん

與河 五蘇山分

一 去白土増上平山以子南取古蘇蘇

初方之 與河 五蘇山分

古蘇山分 東平年古蘇

古蘇山分 東平年古蘇

古蘇山分

一又日

東平年古蘇

他

一 去白土自光准后以款日夫也のん



見候如く其行古麻山分

一 去早坊上守山子後宿京部

一 初山子其行古麻山分

一 去早平込戸塚宿山守年

一 二月山守宿其行古麻山分

一 去早山守中天王守月宿其行

一 去早山守山分

右の口大東江居年法宿其行

右麻山守山守道其行

御見候

一 式口

朱印年山守麻

一 二口

朱印年山守麻

右の通山守山

年八月

天保三年  
赤坂中野白中野夜只しりふ東

赤坂中野書

赤坂中野書

先達而此後... 實為法律改革... 國防... 進進... 軍事... 行政... 財政... 教育... 衛生... 交通... 建設... 國防... 進進... 軍事... 行政... 財政... 教育... 衛生... 交通... 建設...

新成山沙管九家大五所為  
此右信在早ししん早石之經也  
信史大沙管之了

冒

殿坂務備

堀田祐中

長子

井上河内

長子

別部中務

長子

竹山長子

長子

山

赤白(吻)因防(反)筆(九)之(缺)於(方)個(中)  
上(缺)下(缺)係(重)也(以)後

文

書(而)每(其)所(以)係(文)政(八)商  
年(在)是(以)江(戶)系(之)版(之)十  
六(日)沙(免)因(其)行(之)係(之)京

保之度官門於才也然一官  
多分一十年之友又在以友宛  
其川一方之官右  
振石之定重以手招引一子  
席之半札賣捌方義臣  
實事一之亦南之九鏡也亦  
其安亦是也也人

居重長之口數減以事  
右之通中後以積之之  
西個了之

東海社法整一版  
書面一冊下  
五月一十年

免

東海社法整一版  
書面一冊下  
五月一十年

別紙一冊

東海社法整一版  
書面一冊下  
五月一十年

東海社法整一版  
書面一冊下  
五月一十年

五月一十年

別紙一冊

東海社法整一版  
書面一冊下  
五月一十年

東海社法整一版  
書面一冊下  
五月一十年

江戸原右衛門十六日  
御免は與り候に事候に  
官下候方御取寄富多  
分事奉申之度又申度宛  
富多御取寄申候旨  
定是候に格別御取寄  
之礼奉申候旨定是事

右南江丸御取寄に候旨  
是迄  
御免候旨に事候に  
以解申候旨に事候に  
候旨に事候に事候に  
御取寄候旨に事候に  
御取寄候旨に事候に



寄家風格拘了以原之筆  
之法書之其以新法中如通  
其如遠實及及之也堪若  
其下之富一道理亦均矣  
嘗聞之勢其以一方如向  
下者以之為之私實也甚心  
既正其在法之清極也然矣

文政八角年之書定以十五日  
自也定其書以之以來方  
其多分其手之唯今  
之之要之也誠也  
可也老又口之有別其教  
之所  
抑免有之其也名目也

お城の旨物言ふ十二の旨  
右方と贈り申す様宜き重南  
時々々々信守社大御  
此中統志也

御免有らば誠と意と正列紙  
毎度討馬と殿侍御守申  
此後お城の御書付と甚重御

御身一通り申す様宜き  
用事申す古書物と相  
礼物化  
御免有らば誠と意と正列紙  
御免有らば誠と意と正列紙  
自后

御書道堂の事  
此分より外に社田の事  
播磨病系の事  
此中より世に伝へられたる  
只今迄の事  
此等容易に  
御見下す御事との事

此等御事  
此中より社田の事  
播磨病系の事  
此中より世に伝へられたる  
只今迄の事  
此等容易に  
御見下す御事との事

尚附其行也分尚其年方  
未几为年志之拾之官相  
減少其年減少其年  
領道者少人其年有官其  
百右之領其年其年  
其年其年其年其年其年  
極少其年其年其年其年

中其年其年其年其年  
其年其年其年其年其年  
其年其年其年其年其年  
其年其年其年其年其年  
其年其年其年其年其年  
其年其年其年其年其年  
其年其年其年其年其年  
其年其年其年其年其年

只今是之振合是也  
十山溪自來社一  
向山山山山山山  
有山山山山山山  
福山山山山山山  
古山山山山山山  
西山山山山山山

三山山山山山山  
十山山山山山山  
山山山山山山山

東  
只月

法身社ニ恩福系

近東堂社 源渡市 所  
留勅化 亦所 以 身社 也 有  
以 将 尤 以 好 堂 一 再 也 以 中 編

又于格別云東海子細也其  
之有也少何如形也少也其  
動化尤容易  
御免云々云々  
形也少也少也

安政二年十月十日  
各處村々々々々々々々々々

二列流村

去年年一圖 万松寺

動化云々

位光極御建云々

寺中寺親也云々

云々

佐右極子御制礼云  
東照宮より御来申下  
言哉百石并法持多能山山墨  
解之可如家衣布毛之耕  
子水晶之珠敷法音后云  
下重山法中結中云云

天明二年二月國宗

法府内所中  
九年日吉野御化  
云云

五列金條

妙法寺

台徳院極法心云控山  
大建天ノ徳御寺府  
最右院極度ノ山所符云  
法身山所符

持州大派山



云云巳年丁酉  
勅化元元

稻荷列南

大行院

東照宮御降中上法新務  
山札寺元元 元元持取物在社

既御来中頂戴仕由了身

安政八年丁酉  
本對勅化元元

中絶和稿

富伴誓

境内

東照宮中女重山由了身

安永九年丁酉  
勅化元元

甲別

法音寺

東照宮甲別法音寺

御来中頂戴新務執行

了身由了身

同年二月  
五對勅元名

昭元乃對

地藏院

冥子亦佛降之師也新轉

正作身所居也札之乃上

猪利

御亦亦乃裁法新轉

子一也

安永七年  
字法乃對勅元  
名光

山城守治

放生院

台地院稱乃乃亦亦治

稿法送官之師坊舍法修

被立成中法

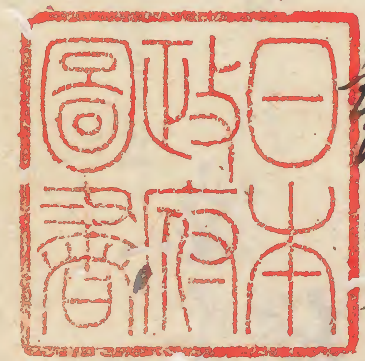
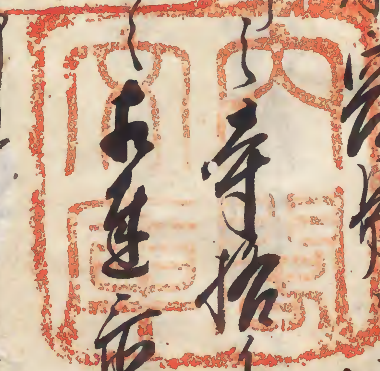
有... 欽... 德... 中... 之... 分...

之... 欽... 德... 中... 之... 分...

比... 格... 別... 寺... 招... 文... 旧... 德... 亦...

比... 格... 別... 寺... 招... 文... 旧... 德... 亦...

比... 格... 別... 寺... 招... 文... 旧... 德... 亦...



南  
政  
庫

南  
政  
庫

